

(Lonely Night Gathering)

さみしい夜の句会報 第193号 (2024.10.27-2024.11.3)

- ◆ 参加者：牛田悠貴、西沢葉火、織星(S.E.I.), しまねこくん、水の眠り、まつりぺきん、吾皇羅、片羽 雲雀、蔭一郎、靈夢、西脇祥貴、宮坂愛哲、しるとも、れいすいき、石川聡、ハツカ館、何となく短歌、リンネリンク、山田真佐明、白石ホビー、鷺沼くぬぎ、桂月、soko、岡村知昭、花野玖、雷(らい)、菊池洋勝、汐田大輝、Nichttrauerchen、胡椒黒、ホワイトアスパラ、熊谷尚、千春、朝森たけ、平本文、藤井智史、もん、みや、馬勝、月立耀、尼寺透、山羊の頭、古城エツ、城水めぐみ、ちゆけ彩緒、輪井ゆう、Gais、名犬、ぼち、音羽、森砂季、月波与生
(五一名)

◆川柳・俳句

起立礼いっせいに飛ぶシャボン玉 城水めぐみ
肌寒の肌がわたくしから逃げた 蔭一郎
はさみの刃みんなひらいて文化の日 蔭一郎
夕空をドミノ倒しに雁渡る 蔭一郎
十月の最後の朝にくる電車 蔭一郎
暮るる秋かの地此の地に虚数打者 尼寺透
爪を切るあなたの知らぬバス停で 千春
羊皮紙の切り取り線がギルバート 汐田大輝
右足を他人の足とまちがえる 汐田大輝
顎の半分が見えないアトリエの鏡 汐田大輝
晴れた日はたにしの吸いつきがわるい 汐田大輝
一日一食の人の舌磨き 菊池洋勝
古地図に見入る我を見入る 雷
月に行く人魚を決めるあみだくじ 岡村知昭

南瓜まで甘い世間にしやがって しまねこくん
ナイフから研いでもない凍み豆腐 山田真佐明
しあわせになれないほうの花は摘む しろとも
ここからは食べていけない浄水機 牛田悠貴

*

プリマどんなにがんばれエ 西沢葉火
終わりなき 道行く供に a Capellaを 織星
縛られて罵声を浴びる淀リバー まつりぺきん
冬隣 汚れ鷺ホーホケキヨ 片羽雲雀
再来年から届いた中島みゆき 西脇祥貴
ただじつと見ている柿が落ちるのを 宮坂愛哲
すがる虫あなたのせいでぼくはいる 白石ポピー
お て ら の お しょ さんが釈尊。 牛田悠貴
後ろ向きに歩く十月終わるから 鷺沼くぬぎ
水はきれいだが蛇口は汚いよ sofa
古酒や菓子を肴とする魔法 花野玖
湯豆腐をこぼせば少なに語る人 Nichtraucherchen
大安が3日続いた後の空 熊谷尚
秋の夜淡し記憶と寂しさと 平本文
何度でも会いたい 猫の長屋にて 藤井智史
待ち時間寂れた街と緑の光 もん
コンドルのジョーが薦めるスキンケア 馬勝
別垢でも投稿したいが同じじゃマズイ 山羊の頭
ぶん投げた春を拾うか悩んでる ちゅけ彩緒
言い訳を手繰る編み針のカチカチ 輪井ゆう

*

いちぬけた みつけてくれぬかくれんぼ 月波与生
チャーシューが不味いチャーシューメンの朝 月波与生
への字ならありのこっせつ 月波与生

◆ 短歌

料理などしなさそうな爪だつて言われたこの手で米を研いでる 月立耀

この旅を気に入ってるよ添乗員がツキヨタケだったとしても 胡椒黒

なくなつたものを心に住ませて幾年も経ち水晶を吐いた胡椒黒

あまりにも多くの犠牲を払つてのウエスト 59 守るむなしさ ハツカ飴

握手して搾取してくるカラフルなシステムで保つ中性浮力石川聡

「しね」のあと「ないよ」とかきたすひとがいてあるいみどつちもさんこくだった 水の眠り

それ実は僕の友達かかわってるなんていえない裏垢だかられいすいき

*

ここまでに立ち入りいさめ優しくも笑ひ遠さく恋ひ焦がれし 吾意羅

女性向け ヒト晩ずっと エロ動画 私にだって 性慾は有る 靈夢

薄荷飴青春みたいな味がして溶かす唾液を甘く香らす 何となく短歌

ゆるやかに永遠が始まるこの夜にどうして君が居ないのでろう リンネリンク

病気の夫の暴言耐えて右足切断の地獄に堕ちる 桂月 独りでは解けないパズル愛情は自分で満たすものであり

たい ホワイトアスパラ 靴裏に付いてしまったガムの所為僕の憂鬱当分続く 朝森

たけ

ひとつだけ落とした指輪ほんとは咲く前に散る花に捧げ
た みや
ペランダで跳ねるバツタに差し出した笹の葉青き架け橋た
った 古城エツ

◆詩・短文

掲載する作品がありません。

◆作品評から

夕空をドミノ倒しに雁渡る 蔭一郎

ゝ雁をドミノの牌に見立てたのが凄いなあと。「ドミノ倒し」は編隊の雁の黒いシルエットや規則的な動きで遠ざかる速さをまざまざ感じるフレーズ。典型的な客観写生と
いうより象徴的描写か。

語彙の選択により瑞々しい季感を伴った臨場感と詩情を生み出す技巧に惹かれます。(石川聡)

「しね」のあと「ないよ」とかきたすひとがいてあるいみどつちもさんこくだった 水の眠り

ゝはじめまして Daisy と申します

この短歌すごく好きです。ひらがな表記と歌の内容があいまってゾクツとしました……! (Daisy)

鱗のように額から肌が落ちるから今日の私は人魚だとする
折戸みおこ

ゝ「額から肌が落ちる」の表現がしっくりこなかったが「私は人魚だとする」の畳み込みが好き。「私は〇〇だと

する」の垂流が生まれそうではあるが。(月波与生)

干柿をくぐつて北政所 しまねこくん

「北政所」の意外性がいい。「干柿をくぐる」というのも何かの比喻かもしれないが思い当たらなかった。(月波与生)

チャーシューが不味いチャーシューメンの朝 月波与生

「関係ないけど何故か、わざわざワントン麵のワントン抜きを注文する人を思い出した。(宮坂変哲)

十月の最後の朝にくる電車 蔭一郎

「新鮮です。(名犬 ぼち)

なくなったものを心に住まわせて幾年も経ち水晶を吐いた胡椒黒

「良…(音羽)

散っている金木犀の残骸をよけてイヤホンの音を上げる
睡密堂

「金木犀は寒さに弱いので青森県ではほとんど見かけない。なのでむせるような甘い匂いも無縁、なんか損している気もするが。(月波与生)

虫すだくフーガばかりのメドレーを 花野玖

「フーガばかりのメドレーを」は好き。でも「虫すだく」だと付きすぎではないかな。(月波与生)

ぽっかりと麦茶の場所がなくなって冷蔵庫から夏が去っていく 水の眠り

「去っていく」は「去っていく」ではダメなんですか。川柳だと字余りでも「去っていく」になります。(月

波与生)

うっすらとレゲエ流れる菊花展 蔭一郎

〜退職してからボブ・マーリーの『ライヴ』ばかり聴いていた時期があった。レゲエのリズムで残り時間を生きられたら。(月波与生)

への字ならありのこっせつ 月波与生

〜虫の脚が折れても骨折とは言わないでしょうが、ひらがなで書く事で絵本的にディフォルメした世界が浮かんできますね。への字も折れた脚を想像させます。口もへの字に曲げて痛そうにしているのかもしれない。早く治ると蟻の世界にも整形外科医がいるのでしょうか。早く治るといいですね。(森砂季)